BATTLE BALLER HARUKA

Ⅱ－6

誤解

Ψ

(Eternity Flame)

バトルボーラーはるか

第二集
星間戦争

第6章
誤解

作・Ψ　(Eternity Flame)

「おい、何しょぼくれてんだ？」
正友はイタズラな感じで、はるかにそう語りかけた。
「…。」
放心(ほうしん)している様子のはるか。正友の語りかけも耳に入っていない調子で、ただ黙って、隕石群(いんせきぐん)が消え見通しの良くなった地球を眺めていた。
「…地球って綺麗(きれい)だろ？」
少し間を置き、秀樹がはるかにそう言って話しを持ちかけた。
「…うん、綺麗だね…。」
「この宇宙の静けさ…遠くに数多(あまた)の星々を散りばめるだけの虚空(こくう)の世界。それが何とも美しく、見てるだけで不思議と心が癒(いや)される。そこに地球が現れると、ひときわ美しく見とれてしまうよな。」
「うん…。」
「闇に散らばる星々の世界。その広大な世界で、地球だけが、ひときわ美しい色彩を持って輝いて見える。まるでそこに暮らす我々人類を讃美しているかのようにな。」
「え!?…」
自分が思った感想を、そっくりそのまま秀樹に代弁されたので、はるかは「はっ」として陶酔(とうすい)から目覚め、現実に引き戻されていた。
「…どうして…それを？」
「心の中を見透かされたようでビックリしたか？大まかだが考えてるコトくらいは分かるさ。」
「そうなの…」
「だが、その“想い”は半分は言い得(え)てるが、半分間違ってるな。」
「どういう事？」
「地球が美しいのは、俺達人間が生きてるからじゃない。ちょっとした言葉尻(ことばじり)の問題なんだが…地球が美しいからこそ、俺達は生きてられるんだ。」
「???…」

「ハハハハ。ちょっと説明が難しかったかな…例えばこの真空状態(しんくうじょうたい)の中、ケルビムのおかげで俺達だけは生きてられるが、普通の人達はこの空間で生きてく事は出来ない。それは分かるよな？」

「…うん。」

「緑があって空気があって…色々な物質があるからこそ人は生きてけるんだ。ホントにちょっとしたニュアンスの違いなんだけどな。だが、同じような言葉でも今の二つの言葉の意味合いは大きく違う。つまり、人が生きてるというのは、物事の成り立ちからして根源(こんげん)がなければならない。空気･水･太陽、他にもいろんな物質が先(さき)んじて存在していなければ生息(せいそく)できないんだ。我々は、いろんな環境が充分(じゅうぶん)に整ってこそ生きてく事ができた訳だから、結果としての存在であって原因とはなり得ない。」

学者のような口ぶりで話す秀樹に、はるかは思考が付いていけてないようであった。

「簡単に言えば、そうだなぁ…人間があって地球という星がある訳じゃないだろ？地球があるからこそ、人が住み暮らしてけるんだからな。」

これ以上、秀樹は簡単な説明は思いつかなかったが、なんとなくはるかは分かってくれたようであった。その様子を見て、秀樹はさらに説明を続けだした。

「俺達は地球に育てられてるってコトだ。さらにこの地球は、もっとより広大なこの宇宙に育てられている。」

「地球は、宇宙がなきゃ存在できないってコトでしょ？」

「そうだ。小さな器が大きな器を納(おさ)められないようにな。その観点から行くと、宇宙は地球の親のような存在という事になる。よく“母なる地球”って言うだろ？砂浜で聴(き)く波の音は、お母さんのお腹にいる時に胎児(たいじ)が耳にする音と一緒だと言うが、その波が押し寄せる海が満ち潮(みちしお)の時に人は生まれると言う。その潮の満ち引きには月の引力(いんりょく)が影響(えいきょう)してるんだ。そういう意味では、人の親が地球で宇宙はその親というのも何となく理解できるだろ？」

「うん…そうだね。」

「俺達が生まれる前。母親の胎内(たいない)にいるかのような環境。宇宙空間は、それにどことなく似てるんだ。だからこの何もないような世界なのに、心が安らぐんだよ。」

「そうなんだね。でも…」

「何だい？」

「宇宙って何からできたの？」

「“原始の炎”という所までしか俺にも分からないな。」

「そうなんだ。」

「その“原始の炎”、神などとも呼ばれる存在が宇宙を造った。その“炎”に関する秘密がソロモン王の秘宝に隠されていると言われている。それを逆説的(ぎゃくせつてき)に考えた者が、宇宙を造(つく)ったという事の意味をどう履(は)き違えたかを考えれば、何でこんな秘宝を巡る戦いが生じたのか分かるんだが…お前には分かるか？」

会話の流れで、今しがたの戦いとは関係のない話が出て、はるかは少し考えた。それで秀樹の話を整理する事は出来たが、質問に対して答える事は出来ないでいた。

「ちょっと今の戦いとは関係ないが…秘宝の話になってしまったので、こういう話になってしまったんだが分からないか？」

「うん、ちょっと…ね。」

「宇宙を造ったという事は、地球も人も…富も力も全てが、その秘宝には内包(ないほう)されているんじゃないかと履き違えた。だから、それを手に入れようと愚(おろ)かな人間が躍起(やっき)になったと推測(すいそく)するのが自然じゃないか？」
「あっ！…なるほど。」
「無論、ソロモン王の秘宝など数千年にも及ぶ歴史の中で誰も本物なんて見た者はいない。“原始の炎”に関する謎が秘められてると言ったって、それすらホントかどうか定かじゃないんだ。噂に尾ヒレ背ビレがついて…そこに欲深い連中が絡んで…。本当に俺達には迷惑以外の何ものでもないだろ？」
「そうだね。」
「そこでだ。結局、俺の言いたい事が分かったか？」
「えっ？」
秀樹の話は起承転結(きしょうてんけつ)が見事で、一見、何を言ってるのか分からないような事でも、最後にはきちんと繋がっている。深い洞察と観察力に裏打ちされた話しぶりは、大学の心理学や歴史の講義以上の膨大な広がりを持つ問題提起(もんだいていき)の複雑さと、検証(けんしょう)から結論へ導く過程への洗錬(せんれん)された合理性と発想力と考察力ゆえ、質問などされても答えなど出せる者など滅多(めった)といないのだが。本人はそれが当り前なので、今イチ分かっていない。
はるかが答えに困ってるのを見て、秀樹はさっと結論を述べ出した。
「…つまりだな。俺が言いたいのは、お前がさっき地球を見ていて思った発想について、俺が意見を言っただろ？」
「うん。」
「俺はどう言った？」
「ちょっとしたニュアンスの違いなんだけど、私は誤解してるって言ったわ。」
「そうだ。お前がした誤解。なら秘宝を巡って争いが起きる原因は何だと言った？」
「欲深い人が秘宝の意味も定かでないのに噂に尾ヒレ背ビレがついて…」
じれた秀樹が、はるかの言葉にかぶせるように喋(しゃべ)り出した。

「秘宝にまつわる話を都合のいいように勝手に履き違えた…つまりは誤解したって事だろ？」
「あっ…そうか！」
「やっと分かったようだな。つまりはだな、誤解する事が争いを生んだという事は、言葉の意味を履き違えると、やがてそれが“争い”という行動を生む。それが宝を巡る事でなくても、誤解するという事は何らかの負の要素を与えるんだ。そして、それはちょっとした事。お前が地球に関して抱いたような些細(ささい)なニュアンスの違いみたいな物から、やがて大きな物へとなっていく。表裏(ひょうり)一体(いったい)という話があるが。微妙な所から枝分かれし、いつしか大きな禍恨(かこん)へとなってしまう事にもつながるんだ。欲という話も出たが、それにしたって欲という言葉の意味を履き違えた末の行動の結果が人を狂わせるきっかけとなるんだ。まぁそれについては、話が長くなるから又の機会に話すがな…」
秀樹がまだ話の途中なのに、今度ははるかが話を被(かぶ)せてきた。
「わたしはその秘宝の鍵となる者として、どうすればいいの？」
誤解の恐ろしさを知ったはるかは、自分の取る行動の先行(さきゆ)きに不安を感じたようで、不安そうな表情をしてそう秀樹に質問をした。
「自分が正しいと信じる道をゆけばいい。」
「正しいと信じる道？」
「そうだ。そして、その道を自分の信頼できる仲間達が賛同し、後押ししてくれるかくれないかで、方向を見定めてけばいいんじゃないのか？」
「自分だけで決めないってコト？」
「そうだな。」
「そういう考え方がないから、今さっきの“争い”も起きたんだね。」
「あぁ。もっと言えば、ポモプンは八大心拳の使い手の一員でしかないのに、自分を“神”と誤解した。そしてそれが今しがたの争いの原因となったんだ。お前達に順序立てて誤解についての説明をする為に、さっきは関係ないと切り離したんだが。結局は、誤解という点では一緒なんだ。」
「正しい道を行くのって難しいんだね。」

「俺にはそんな大それた間違いを犯す者の気持ちは分からんが…難しい人には難しいんだろな。一つ確かな事は、善も悪もその境目(さかいめ)というのは非常に微妙(びみょう)だという事だ。だから、誰が良いとか悪いとか自分で他人を判断せず、自分自身が過(あやま)ちを犯してないか常に自問自答(じもんじとう)し、毎日を謙虚(けんきょ)に生きる。その自問自答しながら進んでく、その自分の道が正しいかどうかを周りとの兼(か)ね合いで知って、間違っていれば修正していけばいいんじゃないのかな。誰にも迷惑をかけず心に何ら恥(は)じる事もない、そんな堂々とした人生を歩む人になれと師匠はよく言われるが、それは、今言ったような事を守る事だと俺は思う。」
「そうだね。」
「人生の選択で分からない事や迷ってしまった時は、俺達に尋(たず)ねればいいんだ。な、正友！」
秀樹が話を振ったのに何の反応もなく、銀竜へ近づいてみると正友は寝ていた。
「どおりで俺達の話に入ってこない訳だ。」
「んもうッ…バカッ、起きなさいよ！」
「ＺＺＺ～…!?…んぁ、あ～ぁ…すまんすまん。つい眠たくなってよ。」
はるかの声に目覚めた正友。自分がいつの間にか寝てしまったのを自覚し、バツの悪さを感じていたが…
「何、寝てんのよッ！」
「うっせぇな！戦いは終ったんだし、構わねぇだろが!!」
はるかにドヤされると、寝起きという状態も手伝い思わずカチンと来て、乱暴な言葉を吐く正友。兄弟子が話をしているのに、それを居眠りでヤリ過ごした事に対する不敬行為が、はるかを怒らせ、反抗的な態度が火に油を注いだ。
「まぁ落ちつけ。」
「でも、お兄ちゃん…。」
「正友も疲れてたんだろ。」
「そうだそうだ。お前と違って、俺ぁ社会人やってんだよ！」

　秀樹と一緒になると、はるかはそれまで何とも思わなかった正友の行動が鼻につきだし、二人の関係はもとの木阿弥(もくあみ)と化してしまっていた。
　せっかく二人の仲を取り持ったのにと思いながらも、秀樹には何故、はるかと正友がこんなにも自分の前で張り合うようにして言い争いをするのか、原因が分からないでいたので何も言わない事にして、ひとまず地球へ帰還しようとだけ提案した。
「秀さぁん。」
正友が泣きつくように秀樹を呼んだ。
「何だ？」
「はるかの目つきが恐ぇよ。」
「お兄ちゃんが弁護してくれるのを言い事に、それを盾にとってアンタが偉そ
　うにするからでしょ!!」
　「キッ」とした、はるかの視線には秀樹もちょっと恐さを感じていたようで、その空気にいたたまれなくなり、そそくさと帰り支度(したく)をし始める合図を出していた。
「もう帰ろう。」
　来た時に潜(くぐ)ったのと同じゲートが現れ、一番乗りに秀樹が逃げこむように行ってしまったので、まだお互い言い足りないようであったが、はるか達も引き揚げる事にした。
　地球―
無事に帰ってきたはるか達を、鮎吉が笑顔で迎えた。
「師匠、ただいま戻りました。」
「フォフォフォフォ…どうじゃった？パーピリオン星人との戦いは。」
「もーバッチリですよ。」
正友がいつもの調子で得意げにそう答えた。
「フォフォフォフォ…そうか。ご苦労じゃったな！疲れたじゃろうから、今日は
　ゆっくり休むがよい。」
「はい師匠。」
はるか達の元気な様子を確認し、鮎吉は安堵(あんど)してその場を去った。

「秀さん…」
「何だ？」
正友が秀樹と小さな声で内緒話(ないしょばなし)をしだした。
「ちょっと、何ひそひそと話してたのよ？」
「いや…ちょっとな…。」
「だから何なのよ！」
はるかは気になって問い詰めたが、正友はのらりくらりとかわして答えようとしない。
「あっ!?もうこんな時間だ！オレ行くわ♪」
「ドコ行くのよ？」
「ちょっと情報収集にな。」
「またどうせロクな用事じゃないんでしょ？」
「おまっ、お前なぁ～…まぁいいや。んじゃ、そういう事でバイバイキーン！」
「馬ッ鹿じゃないのー！」
結局、最後まではぐらかして正友は立ち去っていった。
「アイツ、何処に行ったのかしら…。」
「何でそんな事を思うんだ？」
「何かアイツ浮(う)かれてる感じで急いでたから…。」
「今夜はスチュワーデスさんとコンパとか言ってたっけな。」
「はぁ～コンパ？何が情報収集よ、ほんと馬鹿(ばか)…。」
「そう言うなよ。その後で何かあるんだろ。」
「じゃあ今夜の事で、何かアイツ、お兄ちゃんに言ってた？」
「コンパ楽しみだって言ってたな。」
「それだけ？」
「あと…今夜はお前とロングフライトとか何とかって言ってたな。」
「…ワケ分かんない。」
はるかは呆(あき)れた様子で大きく溜(た)め息(いき)をついた。
「もう遅いからお前も帰りなさい。」
　秀樹のその言葉と、どっと疲れたのも手伝って、思わず言われる通りに別れてしまったはるか。秀樹にも、さっきのひそひそ話しの内容を訊(き)けずじまいに終わってしまっていた。

―数日後。
ゴールデンウィークが明け、陰鬱(いんうつ)とした感じで登校する生徒も多い中。はるかは久しぶりに級友と顔を合わせるのを楽しみにしているみたいであった。
「オッハヨー！」
はるかの背後から、沙織が元気よく朝の挨拶(あいさつ)をした。はるかの身辺がゴタゴタしていたので、近所であるにも関らず、別々に登校した二人。
「おはよう。」
「はるか、宇宙に行ったんだってねぇ～！」
「シ～ッ…駄目じゃない！そんな事、大声で言ったら。」
「ハハハ…ゴメン。それでどうだったぁー？」
「どうって…地球がキレイだったよ。」
「ふーん。私も行きたかったなぁ～宇…んぐぐぐぐ…」
はるかは思わず沙織の口を手で塞(ふさ)いでいた。
「沙織、ワザとやってるでしょ！」
「バレた？」
「んもうッ…怒るよ！」
就学(しゅうがく)時間中は、クラスメート達とゴールデンウィークでの話に盛り上り、はるかと沙織はほとんど話せないでいた。だが、同じクラスなので、無事な顔さえお互いに確認できれば、帰宅は一緒(いっしょ)にする事ができた。
「沙織。」
「なぁに？」
「この三日、何してたの？」
「ヒ･ミ･ツ」
「何ソレー！？」
二人はクラスメートに引き離されたようになり、お互いのプライベートについて話すのは後まわしになってしまっていた。
「そんな事よりさぁー、はるかは宇宙で戦ったんでしょ？その話しを聞かせて
よぉ。」
「もう、あんまり宇宙宇宙って声に出さないでよ。」
サラリーマンの仕事帰りとかち合わないので、バスの車内は人もまばらであったが、どうしても人目(ひとめ)を気にしてしまうはるか。小さな声で話すので、時折(ときおり)排気音(はいきおん)に声が掻き消されてしまい、はるかの話を沙織は何度も聞き返した。

「…そうなんだぁ。スゴい戦いだったんだねぇ～。」
「…うん。」
沙織の言葉に、はるかはしみじみとそう頷(うなづ)いた。そんな事を話している内に、はるか達の家の最寄(もよ)りの停留所(ていりゅうじょ)へとバスが到着(とうちゃく)した。
「秀樹お兄さんの店に寄ってこぉー。」
はるかの返事を待たずして、沙織は秀樹の店へと足を運んでいた。
「こんにちはぁー。」
元気よく入店した沙織だが、店に秀樹の姿はなかった。店番(みせばん)をしている秀樹の妹が言うには、何人かの男達を連れ、彼は文化の森へ向かったのだと言う。
沙織が誰と誰を連れて行ったか尋(たず)ねると、秀樹の妹は知らないと言ったので、はるかと沙織は気になってそこへ向かう事にした。
「お、どうした？はるか！」
文化の森を少し上へ登って行くと芝生(しばふ)の広場があり、秀樹は数人の男達とサッカーに興(きょう)じていた。
男達の素性(すじょう)が分からなかったのと、数日前迄(まで)の激戦の後だったので、もしかすると新手(あらて)の敵でも現れたのかと思ったりもしたが、何事もない様子に、はるかと沙織はひとまず安心をした。
「お兄ちゃんがここに行ったって妹さんから聞いて…。」
秀樹とサッカーをしていたのは、功一と洋一であった。それを確認すると心配事も無くなったので、はるかは駆けつけた訳は言わずにいた。
「おーい!…」
遠くから正友の声がした。はるかが振り返ると、正友が別の男達を引き連れてこちらへ向かっていた。よく見ると、連れてきた男達とは大介と広介であった。
「お兄ちゃん…あの人達…。」
「あぁ…心配するな。パーピリオン星人の洗脳はもう解けている。正友の兄弟
弟子(きょうだいでし)だから、これからは俺達の味方だ。」
「そう…じゃあ挨拶しなきゃ。」
「そうだな。」

「いやぁ～。待たせたね。おー、はるかじゃん！何しに来たんだ？」
「スチュワーデスさんとの合コンはどうだった？」
「えっ!?…な、何を藪(やぶ)からスティックに…何の事かな…。」
「何、ワケの分かんない事言ってるのよ。」
正友のルー語は全くウケず、はるかに白い目をされてしまった。
「秀さーん…ヒドイじゃねぇ～かよォ。」
侮蔑(ぶべつ)の視線に、いたたまれなくなった正友が、コンパの事をリークした秀樹に、そうボヤキかけた。
「えっ!?俺は何も言ってないぞ。」
「秀さん以外に誰がいるんだよ！」
正友の追撃(ついげき)に、事もなげに秀樹は―
「いやー…田舎(いなか)って建物とか障害物(しょうがいぶつ)が少ないから、
お前がハシャいでる声が聞こえて行ったんじゃないのか？」
そう言ってトボケて見せた。
「んなワケないでしょーが！…もう参ったなぁ。」
秀樹には敵わないといった感じで、秘密をバラされた上に、はるかになじられ笑い者にされたにも関らず、正友はそう言って苦笑いをしていた。
「ハハハハハッ…」
漫才(まんざい)のような三人のやりとりに、沙織が笑い出すと、堰(せき)を切ったように全員にその波が広がっていった。

「いやぁ～。待たせたね。おー、はるかじゃん！何しに来たんだ？」
「スチュワーデスさんとの合コンはどうだった？」
「えっ!?…な、何を藪(やぶ)からスティックに…何の事かな…。」
「何、ワケの分かんない事言ってるのよ。」
正友のルー語は全くウケず、はるかに白い目をされてしまった。
「秀さーん…ヒドイじゃねぇ～かよォ。」
侮蔑(ぶべつ)の視線に、いたたまれなくなった正友が、コンパの事をリークした秀樹に、そうボヤキかけた。
「えっ!?俺は何も言ってないぞ。」
「秀さん以外に誰がいるんだよ！」
正友の追撃(ついげき)に、事もなげに秀樹は―
「いやー…田舎(いなか)って建物とか障害物(しょうがいぶつ)が少ないから、
お前がハシャいでる声が聞こえて行ったんじゃないのか？」
そう言ってトボケて見せた。
「んなワケないでしょーが！…もう参ったなぁ。」
秀樹には敵わないといった感じで、秘密をバラされた上に、はるかになじられ笑い者にされたにも関らず、正友はそう言って苦笑いをしていた。
「ハハハハハッ…」
漫才(まんざい)のような三人のやりとりに、沙織が笑い出すと、堰(せき)を切ったように全員にその波が広がっていった。
「…それはそうと、自己紹介するんじゃなかったのか？はるか。」
場が落ちついたので、秀樹がそうはるかに言った。
「あっ…そうだね。大介お兄さんに広介お兄さん、これからヨロシクお願いし
ます。」
「あっ…どうもよろしく。この前は失礼しました。」
広介が先日までの非礼(ひれい)を詫(わ)びた。
「あの…覚えてるんですか？」
「はぁ…まぁ～記憶(きおく)だけは…。」

「操(あやつ)られてたんだから、そんなコト気にしないで下さい。」
「そう言ってもらえると…自分も気が楽ですぅ…。」
はるかと広介が話し終えると、大介が続いて口を開いた。
「あ、あの…」
「あ、大介お兄さんですね。ヨロシクお願いします。」
「あの、初めまして…。」
「えっ？」
食い違う会話に、はるかは“きょとん”とした表情をした。
「大ちゃんさん初めてじゃないッスよ！」
正友がそう言って大介をフォローした。
「あ、あっ…そ、そ、そうやな…よ、よろしく。」
「大ちゃんはちょっと緊張してるみたいだな。」
今度は秀樹がそう言ってフォローしたが、大介は武骨(ぶこつ)で、拳法一筋の男で、生来(せいらい)の口下手(くちべた)であった。その上に女の子に対して免疫(めんえき)がない為、気後(きおく)れてしどろもどろになっているようであった。
「あっ、ところでこの娘(こ)は沙織ちゃんだ。皆、よろしくな。」
秀樹はさっさと話題を変えた。
「よろしくお願いしまぁす。」
「お兄ちゃん。洋一さんと功一さんも紹介しないと…」
はるかの言葉に、「その必要はない」と秀樹は返答した。
「なんで？」
「実はお前には話してなかったんだが。沙織ちゃんは洋一と功一に武道の稽古
(けいこ)をつけてもらったんだ。これからの為にな。」
「これからの為…？」
「まぁ別に深い意味はないんだが…自分の身の安全くらいは守れるように、
より高度な技を教わらせたってだけだ。」
「…そうなの。」
「おーい！挨拶も終わったんだから早く始めようぜ。」

正友は早く体を動かしたくてウズウズしているようで。サッカーボールを手にした状態でそう言い、試合を始まりを急かした。
「せっかく来たんだから、お前達もやってくか？」
「えっ…何をやるの？」
まさかただのサッカーではないと思ったはるかが、秀樹に説明を求めた。
「サッカーにルールは似てるんだが。組手(くみて)の修業が入ってて、足でボールを蹴って行って向こうに立てかけてある安全機(あんぜんき)にシュートを当てればいい。ヘディングもありだし、ボールを手で持ったりはダメなのはサッカーと同じだが。ただし、人対人(ひとたいひと)がボールを奪い合う時には、手で押し合っていいんだ。摑(つか)んだりコケさせたり、上半身ならドコに技をかけてもいい。」
「ふーん…面白そうね。」
「普通のサッカーより格段(かくだん)に面白いぞ。俺達武道家の間では、凄く流行(はや)ってて、今回は大ちゃん達の歓迎(かんげい)と親睦(しんぼく)を深める上でもスポーツがいいって言うんで、コレをやる事にしたんだ。今から4対4で見本を見せるから、やり方が分かったら、お前達も参加すればいい。」
「４対４？」
自分達には見学をしていろと言うのに、秀樹の言った人数では、メンツが足りないと思ったはるかは、不思議そうな顔をした。
「あぁ…もうすぐ師匠が来るんだ。」
「残りの一人は？」
「ここだよ。」
はるかの視線は、大人の背丈(せたけ)に合わせていたので気づかなかったが、胸元(むなもと)の辺りから少女の声がした。
「美優ちゃん！？」
その声の主は秀樹の姪(めい)っ子であった。
「はるかお姉ちゃん、こんにちは。」
「美優ちゃんもサッカーやるの？」
「うん、やるよ。」

「コイツ、チビのくせに結構やるんだぜ。」
正友が美優の頭を撫(な)でながらそう言った。
「チビって言うな！」
「ふぐおぉ!?…」
後ろから頭を気安く触られた上に、正友の馬鹿にしたような言葉を聞いた美優は、振り向きざまに、正友の腹を殴った。
「お、お前…子供じゃなかったら…ブッ飛ばしてるぞ…。」
「バーカ！」
見かねた秀樹が美優をたしなめようとした。
「美優！お前は小学４年生で正友より１コ年上なんだから、お姉さんらしくしないとイケないぞ。」
「秀さーん…そりゃないよー。」
秀樹の言いように正友は恨(うら)めしそうにそう言ったが、美優も含め他の皆は吹き出していた。
「美優よ。乱暴(らんぼう)はイカンのぉ。」
「お爺ちゃーん♪」
遅れてきた鮎吉は美優が正友を殴(なぐ)った所を見て注意しようとしたが。美優は人によって態度をガラリと変え、本当の祖父のように甘えて鮎吉を見るや“お爺(じい)ちゃん”と言いながら抱きつき、子供らしく振るまって要領(ようりょう)よく注意されるのを免(まぬが)れていた。
「チッ…ゲンキンな奴だなー。鮎吉師匠の前では可愛(かわい)らしくしちゃって…。」
鮎吉が孫に接するように甘える美優を抱きしめると、それを見た正友が小さくそう不満を漏らした。
「まぁいいじゃないか。それよりもゲームを始めるとしよう。準備はいいですか師匠？」
秀樹はとりあえず話を進めて、皆の親睦を深める事を優先した。正友側と秀樹の囲(まわ)りにいる者達とが、たまたま４対４に振り分けられるような形になっていたので、そのままその立ち位置でチームを編成させる事にした。

秀樹チーム
鮎吉　美優　洋一
正友チーム
大介　広介　功一

ルール＝フットサルとほぼ同じ。安全機をゴール代わりに立てかけた物にシュートを当てて倒すか、その下をくぐらせると得点。ボールを奪いあう際は上半身に対しての攻撃が許される。ただし打撃攻撃はなし。押す･引く･投げると行った攻撃のみで足を使ってはいけない。特別ルールで子供(美優)と対する時は利き腕の使用は不可。

「みんな、ルールは分かったか？」

秀樹は手短(てみじか)にルールの確認をすると、ホイッスルを鳴らした。

「行くぜ！」

キックオフと共に、正友が勢いよくドリブルで飛び出した。

「通さないよ！」

「それ、パース！」

序盤(じょばん)から洋一との組手にもつれるのは厄介(やっかい)だと考えた正友が、広介にパスを出した。広介はじきに鮎吉のマークに遭(あ)い、慌てて大介にボールを回そうとしたが組手に持ちこまれ、その間をスリ抜けて小さな美優がボールを奪(うば)った。

「大ちゃんさーん！」

正友が近くにいた大介に守備をさせようと呼びかけた。

「えっ!?な、何？」

ところが大介は正友が自分を呼んでいる意味が理解できず、聞き返そうと耳に手をあて正友の方に体を向けようとした。

「大ちゃんさん、そうじゃないって。そのチビッ子からボールを奪うんですよ！」

「あっ…う、うん。」

正友は慌てて言葉にして指示を出し、ようやく意味を理解(りかい)できた大介が、美優と迫(せ)り合おうとしたのだが。すでに美優は大介の目の前までドリブルしてきており、反応が遅れてしまった為に敢(あ)えなく抜き去られてしまっていた。

「遅いよーだ！」
　そう言って得意気(とくいげ)に後ろを振り返った美優。ゴールである安全までは十メートルと距離がなく、その先には誰もいなかったので、余裕を見せていたのだが。
　再び前を向くと、数歩先には功一がいて、振り返りざまに美優は急ブレーキをかけ、止まらざるを得なかった。
「美優ちゃん、油断したね。」
　後ろを振り向いた美優のドリブルの速度が少し遅くなった為、功一は追いつけた。そして振り切ろうとする美優の腕を摑んだ。
　子供の美優とは片手でしか組み手が許されない大人の功一。だが、柔道(じゅうどう)の襟(えり)や袖(そで)の取りあいと、腕の関節の極(き)めあいをミックスしたような技の応酬(おうしゅう)を、数手(すうて)している間に、足元がお留守になった美優は、ボールを蹴り出されてしまっていた。
「ナイス功一！」
　正友のいる付近にまで、ボールは押し返されていた。勝ち誇った顔で美優を見つめる正友。
「大ちゃんさんと広介！ゴールの方へ向かえ。」
　三人は一斉に秀樹チームのゴールを目指して走り出した。
「ホホホ…正友が相手とはキツイのぉ。」
　ボールを手にした正友の前に立ちはだかったのは鮎吉であった。スピードでは敵わないと踏んだ鮎吉は、距離を置いて、正友の動きを見て最小限の動きで対応できるように守備をしており。正友は足止めされている内に、洋一が後ろからボールを奪おうとかかって来る気配(けはい)を察知(さっち)していた。
　すると、正友は洋一の方へくるりと回転し、ボールを自分の顔の前に浮かせ、ボールに気を取られた洋一をのけぞらせた。そこに手で肩を押して、のりかかるようにすると、宙に浮いたボールをボレーで蹴りあげ広介にパスを出した。
「あっ!?やられた。」

洋一は倒れながらボールの行く先を見てそう言った。正友は着地(ちゃくち)すると、抜群(ばつぐん)の脚力(きゃくりょく)で鮎吉の前を走り抜けた。鮎吉は慌(あわ)ててゴールへ戻ろうとしたが、反転しての行動は正友には間に合わず、近くの大介のマークに向かった。
「マイッたな…。」
ゴール前では秀樹がまだ一人で残っていたが、広介と迫りくる正友の二人を相手にどうすればいいのか迷っていた。広介はゴールの右サイドへと開く動きをし、正友は最短距離(さいたんきょり)の中央を全力で駆け上がった。
「もらったぜ！」
ドリブル突破をする素振りを見せた広介であったが、斜め後ろから猛烈(もうれつ)にゴールへと向かう正友の気配を察知し。パスしろと言わんばかりの呼びかけに応じて、マイナス角度にバックパスを出すと、最後にボールは正友によってゴールへと流し込まれた。
「はい、一点っと♪」
正友は凄く嬉しそうな顔をした。
「どうよ！今の頭脳(ずのう)プレー。」
寄せばいいのに、正友は美優に向かって自慢(じまん)げにそう言った。
「あっ…ＵＦＯだ！」
「何ッ？嘘ォ!?」
ムッとした顔をした美優が、表情を一変させ、空を指さし見上げると、思わず正友がその方向を向いてしまっていた。その場にいた全員が、正友の見せた反応(はんのう)につられてしまっていた。「ＵＦＯ」という言葉に普段(ふだん)なら反応などしないのだろうが、数日前にパーピリオン星人と戦ったはるか達には、とてもリアルな話に聞こえたのである。
しかし、それは真っ赤な嘘で、正友が空を見上げ、背を向けると、美優はジャンプしてオーバーヘッドキックをし。正友の頭頂部(とうちょうぶ)につま先を突き立てるかのように浴びせかけた。

「ふげェッ!?…お痛ッ…」
片膝(かたひざ)を地につき、頭をかかえて悶(もだ)える正友。
「コラーッ！何さらすんじゃテメェ!!」
「何が？」
正友の怒りに対し、ふてぶてしくシラを切る美優。
「何ってお前、オレの頭蹴(け)っただろ！」
「知らないよ。宇宙人がイタズラしたんじゃないの？」
「っざけんなッ!!」
「お爺ちゃーん、正友がコワイよ～ッ。」
凄い剣幕(けんまく)で言いがかりをつけられ迷惑してると言わんばかりに、美優がしおらしく鮎吉の足元にしがみつく。鮎吉は孫のような美優が可愛くて仕方なく、一方的に言い分を鵜呑(うの)みにし、正友をたしなめた。
「これ、正友！変な言いがかりをつけて子供をイジメちゃイカンぞ。」
「だってコイツがオレを蹴ったんですよ！」
「誰か見た者はおるのか？」
ＵＦＯが飛んでると美優がついた嘘に、思わず皆が空を見てしまっていたので、現場を見た者はいなかった。それは美優のとっさの思いつきだが計算ずくの行動で。鮎吉の膝(ひざ)にしがみつきながら後ろを振り返った美優が、正友だけを悔(くや)しがらせようとニヤついた笑顔を見せ、無言(むごん)の犯行声明(はんこうせいめい)をだしていた。
「くぅぅ～…。」
正友は悔しかったが、証拠(しょうこ)がないという皆の総意(そうい)を無視できず、美優の計算通り誰がやったか有耶無耶(うやむや)になってしまったのを受け入れるしかなかった。
「ちぇっ…アイツ、知恵の回る所だけは秀さんに似やがって…。」
皆の手前、正友は引き下がらざるを得なかった。はるかや秀樹達も美優がやったんだと薄々(うすうす)は思っていたのだが、子供のやる事だから多目(おおめ)に見ていた。そこら辺も美優はよく分かっていて、最大限にその特権(とっけん)を生かしていた。

「はるか、沙織ちゃん。大まかな感じは分かったかな？」
いがみ合う美優と正友にいつまでも構ってもいられず、秀樹が話を進めた。
「うん。」
「はーい♪」
二人の返事は申し合わせたかのように、重なった。はるかが秀樹のチームに入り、沙織が正友チームとに分かれて再び試合が始められた。
「今度もオレ達が勝つ！」
正友はゲームが始まると、またテンションが上がり、軽快(けいかい)に公園中を走り回っていた。
「…さっきまで怒ってたのに。ホント単純なんだから。」
正友の気持ちの浮き沈みの激しさに付いていけないといった感じで、はるかがそう呟(つぶや)いた。
「アイツはあんまり引きずらないタイプだからな。なもんで感情の起伏(きふく)が激しいように見られがちだが、それはアイツの長所でもあるぞ。」
はるかの呟きに秀樹がそう言って、正友を庇(かば)った。
「お兄ちゃんは、正友を買いかぶり過ぎなんじゃないの？」
「そんな事ないさ。お前だってこの前の修業で、アイツの良いトコが見えただろ？」
「…。」
はるかは返事をしなかったが、秀樹は自分の問いかけに対し、思いあたる節(ふし)があるから無言になったのだと表情から見て取り。はるかも一応(いちおう)は正友を評価(ひょうか)してるのだと分かったので、その話題を止めた。
正友は極端な感情表現をするので、その落差(らくさ)が悪い印象を強調させてしまっているから、はるかが戸惑うのも無理はないと秀樹は思ってもいた。
正友のチームは５人全員が攻撃の姿勢(しせい)を見せ、陣(じん)を前に進めてきたので、はるかと秀樹も会話をヤメて身構えた。一進一退(いっしんいったい)の攻防(こうぼう)が続き、焦(じ)れた正友が強引にシュートを打とうとした。

「正友グレートファンタスティックタイガシュート(ただのシュート)！！」
　正友は離れた距離からゴールを狙った為に力んでしまい、シュートがあさっての方向に飛んで行ってしまった。
「何やってんだよ。」
　秀樹はそう言ってボールの飛んだ先を見ると、その先には犬を連れた女性が歩いてきていて、それを見た瞬間に、秀樹が女性に向け絶叫(ぜっきょう)した。
「危ないッ!!」
　正友もほぼ同時にその危険を察知したが、どうしようもない状況に何も言えないでいた。武道で限界まで体を鍛えあげた正友。彼が全力で打ったシュートは内力も加わり、ヘビー級のボクサーのパンチよりも何十倍も強力だと推測される。常人(じょうじん)がまともにぶつかった場合は、かなり危険であった。
　何とか外れて欲しいと、全員が祈るような思いで、数秒にも満たぬ時間を、とてつもなく長く感じていたのだが…。
事態は予想外の展開をする。
　ボールは無上にも女性の顔面に向け、勢いよく飛んで行った。誰もが事故になるのは防げないと目を覆いたくなるような事態に、頭が真っ白になりながらも、とにかく助けに行かねばと思い、女性の元へと駆け寄ろうとした瞬間。
　なんとその女性は、凄まじい勢いで向かってくるボールを紙風船でも摑むかのように、片手でいとも簡単に受け止めてしまったのだ。
「バカな…!?あれは化勁(かけい)…。」
　誰もが首をかしげる中、秀樹だけがそう言って、女性がただ者ではない事を見抜き、同時に不吉な予感に恐れを抱いていた。やがて、女性の顔が見え出すと、その予感は現実の物となっていく。
「まゆみ姉さん!?」
　正友がそう驚きの声を上げた。
「何ッ!?」
　正友の声を聞き、秀樹が慌てた声色(こわいろ)でそう言った。その波紋(はもん)は鮎吉やはるかにも広がり、やがてざわめきとなった。

彼女こそ秀樹の前の恋人であり、その久しぶりの再会があまりにも偶発的(ぐうはつてき)でショッキングだったのもあるが、秀樹と正友の取り乱しようが理解できず、どういう意味でそうなってるのか皆が口々に相談しあい、動揺(どうよう)が広がったのである。

化勁(かけい)を使った所から拳法の達人である事は予想されるが、それ以外の情報がはるか達にはなく、秀樹と正友までもが恐れる“何か”が相当な物であるだろうには違いはないが、それが何なのかは分からない不安が、余計にはるか達を不安にさせ混乱させていた。

「ずいぶんなご挨拶ね。」

ビッキー・チャオに似た細身の美女が、そう言って大きな瞳を「キッ」と鋭くさせると、どよめきは畏怖(いふ)によって静寂(せいじゃく)へと一気に変化した。

「まゆみ…どうしてここに？…」

秀樹は緊張が極度に達したのか、機械音のような棒読(ぼうよ)みで、そう言った。

「ここは公園。誰が何をしようと勝手じゃないの？」

秀樹はそう言われると、イジメられっ子のように俯(うつむ)いたまま、何も言えないでいた。いつもの秀樹からは考えられない自信喪失(じしんそうしつ)ぶりに、はるか達までもが萎縮(いしゅく)してしまっている。さっきまでの賑(にぎ)わいが嘘のように静かな公園内。次の瞬間、辺りの空気はさらに凍りつく事になる。

「何を暗く静まり返ってるの？…あぁゲームしてたのよね。これがないと出来
ないのなら返してあげるわ！」

そう言うと、まゆみは手にしたサッカーボールをボーリングの投球フォームで正友めがけて投げつけた。さっき、まゆみの元へとボールが飛んできた時とは、距離が大分短くはあったが、それを差し引きしても、まゆみが手で投げたボールの方が、正友が蹴ったのよりも、スピードも威力も圧倒的に上であった。その勢いの前に正友は身動きが取れずにいた。

「うぉああぁぁ…!!」
ボールが体に衝突(しょうとつ)すると、叫び声を上げながら正友が弾き飛ばされてしまった。
「正友ぉーッ!!」
慌てて秀樹が駆け寄ったが、他の者達は、遅れて鮎吉が向かっただけで、まゆみの凄まじい力を前に驚き、その場に固まってしまっていた。
「ウフフフ…ちょっと力が強かったかしら。」
まゆみは冷たく笑いながらそう言った。
「うぐぐぐ…なんて力だ。」
正友は苦しそうにそう言った。
「大丈夫か？」
起き上がれない正友の上半身を抱え、心配する秀樹。
「あぁ…なんとかな。」
まゆみのいる方向へ顔を向けると、秀樹が重い口を開いた。
「まゆみ、俺が気にくわないなら俺に当たればいい。だが、関係ない者を巻き
込むな！」
その言葉を鼻で笑ったまゆみ。
「あなたが気にくわない？何を思い上がってるの？」
そう言って鋭い視線を秀樹に浴びせた。
「…なら何が不満で、こんな乱暴な事をするんだ？俺には君のやる事が理解
できない。」
「別に…。」
秀樹が嘆(なげ)くようにまゆみに問いかけると、彼女は表情を曇(くも)らせ言葉を濁(にご)した。
「…なぜ黙ってしまうんだ？昔から君は自分の殻(から)に閉じこもって…いつ
だって肝心(かんじん)な事には応(こた)えようとしてくれない。」
「…応えたからと言ってどうなると言うの？」
まゆみはふと遠い目をした。遠景(えんけい)の虚空(こくう)に何かを思い出したのか、少し寂しげにそこを見つめたかと思うと、すぐに元の澄ました顔つきに戻っていた。

「そうやっていつも君は自分で何でも判断してしまう。俺達は力不足かも知れないが、一人で悩みや苦しみを抱え込むよりは…」
「抱え込む？あなたに何が分かると言うの？何もできないくせに！」
秀樹が説き伏せようとしたが、全て言い終えぬ内に、まゆみはそう言い切った。
「どうして…」
まゆみの強い口調と、理解不能だが激しい怒気(どき)に秀樹は絶句(ぜっく)してしまっていた。
「まゆみお姉さん！」
「あら、はるかちゃんじゃない…大きくなったわね。」
黙り込む秀樹を見ておれず、険悪(けんあく)な空気をなんとかしようとして、はるかがまゆみに話しかけた。はるかは幼かったので、触れあう機会もなかったが、まゆみの方ははるかをよく知っていてるような口ぶりであった。
「お姉さん、何かわたし達にお話しがあってここに来られたんじゃないんですか？」
「別に何もないわ。何度も言うけどここは公共の施設よ。私が来ちゃ悪い？」
「いえ…でもただ来ただけなら、正友を傷つける理由なんてないハズだわ。」
「…あの子がヒヨッ子だから怪我(けが)したのよ。ちょっと修業が足りないんじゃない？」
「ならお姉さんは他の人にも正友にしたような事をするんですか？」
「…。」
「正友や秀樹お兄ちゃんにそんな事をするのは理由がある筈(はず)です。お兄ちゃん達に非があるのなら、わたしが代わって謝るし、改めさせますから…どんな事で怒ってられるのかだけでも教えてくれませんか？」
「…怒ってなんかないわ…ただ悠長(ゆうちょう)に遊んでるあなた達をからかってみたかっただけよ。」

「わたしには怒ってるのかどうか分からないけど、何かお話ししたい事がある
んじゃ…」
「ないわ！あなたもしつこいわねッ!!」
まゆみは急にヒステリックになった。その態度が「ない」と言い張っているのは嘘である事を如実(にょじつ)に物語っている。だが秀樹と同様に、はるかに対しても言葉を遮(さえぎ)って話しあう余地(よち)を与(あた)えなかった。大介や洋一達はまゆみの迫力(はくりょく)に圧倒され、会話に入ってすら来れない。
はるかだけが、ひるまず最後まで粘(ねば)ったのだが…まゆみと渡り合える者はもういなかった。パーピリオン星人との激戦を終えた折(おり)、秀樹から聞かされた“誤解”についての話し。はるかはそれについて自分なりの見解(けんかい)をし、誤解は話し合えば解けると思ったので、何とか仲を取り持ちたいと願ったのだが。それが叶わぬと知り“しゅん”としてしまった。
「どうしたの？みんな元気がないわね…あぁ、私がお邪魔したので機嫌が悪い
のね。なら、もう立ち去るわ。私もあなた達に用はないし…お邪魔したわ
ね。」
まゆみが帰ろうとすると―
「ちょっと待ってくれ！」
秀樹が彼女を呼び止めた。
「何よ？」
「一つだけ聞かせてくれ。…なぜ別れを告げずに、君は俺の元を去ったんだ？」
「そんな事、今さら聞いてどうするの？」
「俺は今でも君の事が…」
「私には…関係ないわ！」
まゆみの言った台詞は本意でないのは、言葉が詰まった事からも明白であった。しかし、秀樹はその言葉を聞いて愕然とし、座りこんだまま項垂(うなだ)れてしまった。

「お兄ちゃん…。」
そんな秀樹の姿を見て、はるかは胸が苦しくなり、彼の名を呼び声をかけようとしたが。何と慰(なぐさ)めていいのか分からず、声が先細(さきぼそ)りしてそれ以上は何も言えなくなっていた。秀樹が茫然(ぼうぜん)としている間に、まゆみはどこかへ立ち去ってしまっていた。
「うぐぐぅぅ…秀さん、このままでいいのかよ？」
息もできないほどの痛みから、何とか喋(しゃべ)れるようになった正友が、秀樹にそう問いかけた。
「…えっ!?何か言ったか？」
「何かって…。秀さんはあの人の前だと、てんでダメダメ人間になっちゃうよな。」
「…すまない。」
「謝られてもしょうがないじゃんかよ、うぐぐ…」
秀樹が立ち上がり、皆に謝(あやま)ろうとすると―
「秀樹お兄さん、一体あのまゆみさんと何があったんですか？」
今まで控(ひか)えていた沙織だが、秀樹の事がやはり気になるようで、そう質問をした。
「ここにいる皆のほとんどが知っていると思うが…俺はあの女(ひと)と愛しあ
っていた…それが色々あって別れる羽目(はめ)になった。その時と同じくして
強大な負の力がこの徳島に生まれたのを俺は感じたんだ。そして…ちょうど
その頃、まゆみは俺の前から姿を消した。」
「何で別れたの？…」
眉山の修業で秀樹の気持ちを知っているはるかは、あんなに好きなのに別れた理由が理解できず、そんな質問が思わず口をついて出してしまっていた。
「それは…俺のせいかも知れない。だが、今はそんな事を話してる場合じゃ
ない。」
秀樹はそう言うと全員を見回しながら話していた視線を、はるかだけに向け話しだした。

「はるか。…前にフェニックス心拳の伝承者(でんしょうしゃ)の話をしただろ？」
「…うん。」
「そしてこの前の異星人[パーピリオン]との戦いで話した誤解についての事なんだが。善も悪も表裏(ひょうり)一体(いったい)だと俺はお前に言ったよな?」
「そうだね。」
「誤解や勘違(かんちが)いが善と悪の分岐点(ぶんきてん)となる。そしてその性質や考え方はほぼ同じ。悪人だろうと善人だろうとご飯を食べ、睡眠を取ったり、人間である事に変わりはないと言う事が言いたいんだが…分かるか？」
「えぇ。」
「誤解はそれらの根源となるから俺自身も迂闊(うかつ)な事は言えない…。だが、一つ確かなのは、お前がフェニックス心拳の伝承者になる前。前伝承者はその資格を捨てたんだ。それが徳島に大きな負の力が生まれた時と重なるんだ。」
「そんな…まさか!?…」
「前伝承者に何があったのかは分からんが、本人は何かで誤解をして人生に躓(つまづ)いてしまい、負の感情が生まれた事により、秘宝を守る聖職者(せいしょくしゃ)たる清(きよ)い心を失ってしまった。その原因は分からんが…それからしばらくして“女帝”と呼ばれる闇の存在が、俺達の耳にも入ってくるようになったんだ。」
「女帝…。」
「あぁ。女帝と言われるからには女性という事になるだろ？…フェニックス心拳の前伝承者も女性なんだ。」
「まさか…。」
そこまで言われて、はるかはそれが誰だか察し、驚きを隠せないでいた。

「そうだ。…前伝承者とはまゆみだ。」
秀樹の言葉でもそれだけは信じられないという顔を、はるかがした。誤解という言葉の重みが、はるかの胸にのしかかった。
「善と悪、光と影。色んな話しをしたが、こうやって喋(しゃべ)ってる俺自身、
自分でも信じられない気持ちでいっぱいで話しをしている。だから、客観的
な状況(じょうきょう)を言ったつもりだ。いずれ真実が分かる時が来るだろう
…今日、彼女の力を見て驚いたとは思うが、彼女はタイヘンな使い手だ。
俺の推測が外れて欲しいと俺自身が一番想ってはいるが、もしまゆみが
“女帝”であれば、相当に手強い。だからこんな話しをした…。」
以前に鮎吉と秀樹から光と影の話し等について、きっと女帝とはどうしようもない悪人なんだと思っていたはるかは、驚きを隠せないでいた。
秀樹がまゆみの事で深刻な表情をするのは、複雑な理由があっての事なんだなと思い、過去にどんな出来事があったのか色々訊いても見たかったが、気の毒で何も言えずにいた。
「分かるな？はるか。」
「えっ!?」
「“女帝”という存在がお前を狙(ねら)ってるのは明らかだ。それがまゆみだ
としたら、今のお前じゃ勝てない。心して修業に励(はげ)めってコトだ。」
「う、うん。」
思わず頷いたはるかだが。そう遠くない未来への心構えとしてこれだけは訊いておかねばと思い、沈んだ声で話しを切り出した。
「お兄ちゃん…」
「何だ？」
「もし、まゆみお姉さんが“女帝”だとして戦う事になったら…」
「なったら何だ？」
「お兄ちゃんは平気なの？」
秀樹はその言葉に返事ができなかった。
「はるかよ、そうなった場合は儂(わし)が何とかする。心配するでない。」
長い沈黙を破って鮎吉が話しだした。

「まゆみは、儂が先々代(せんせんだい)のフェニックス心拳の伝承者から託され
た大事な弟子じゃ。その弟子の不始末は儂がつける。」
「おじいちゃん…。」
「まだ何か訊きたい事はあるか？」
「もし、まゆみお姉さんが“女帝”だとしたら…やっぱり悪い人なの？」
「どんな動機(どうき)や事情があるか分からんが、どういう理由にせよ、やって
る事は悪い事じゃ。もしあの娘がそうだとしたら、儂が命をかけて立ち直ら
せて見せる！…よいな？」
秀樹の「もし」という仮定や推測には、そうであって欲しくないという情が強く出ていたが。鮎吉は逆で、大きな太い眉を厳しく歪めていた。が、秀樹とは違った意味での愛情がそこには垣間見えていた。
(こんなに想われてるのに…)
そんな感情が思わず沸いたはるか。二人の気持ちを何とか伝えてあげたいと切実(せつじつ)に思うはるかであった。一体、秀樹とまゆみの間に何が起きたのか、それははるかには分からないでいたが、これだけ暖かい心を持った二人に背を向ける事がどんなに悲しい事だろうか。
秀樹と鮎吉だけでなく、きっとまゆみも苦しんでいる筈なのは、彼女が一瞬見せた哀しそうな瞳が物語っていて、それがはるかには切なかった。何故なら秀樹がまゆみの事で苦悩(くのう)する姿は、はるか自身の姿と重なるからであった。
秀樹が自分以外の女性に思いを馳(は)せるのが、はるかには辛かった。形は違うが、すれ違いとは苦しい物なのはよく理解できた。それが他の女(ひと)との情のもつれだったとしても…。好きな人が苦しむのを見てられなかったのである。
「お兄ちゃん。」
「…何だ？」
「光と影って話しで、欲望とか野心(やしん)に負けた人が悪い人になるって聞
いたけど、もう一つのケースがあるって言ってたよね。」
「そんな話も…したな。」

「他人を妬(ねた)んで陥れる人がいるってお兄ちゃんは言ったわ。もしかしたら、まゆみお姉さんも誰かにたぶらかされたり、そそのかされたんじゃないのかな？」

まゆみが自分の意志で秀樹達から離れたとはどうしても思えず、はるかはそう言って自分なりの考えを述べた。

「そそのかされたか…そうとも取れなくもないな…。」

女帝がまゆみかそうでないのかという問答の筈が、はるかは知らぬ内に秀樹とまゆみが別れたきっかけの核心(かくしん)に触れてしまっていて、秀樹は古傷(ふるきず)を思い出して悲しそうな顔をしたが、大きな溜息(ためいき)をつくと、決意して話しをし始めた。

「俺とまゆみの絆(きずな)を断ち切った者がいる。俺は男として彼女の幸せを願ったつもりで身を引く決意をした…それから彼女はおかしくなった。誰かに入れ知恵されたか、あるいは自ら道を踏み誤ったかは定かではないが、もしも“女帝”がまゆみだとしたら…俺のせいだ…。」

「秀樹よ、自分を責めるでない。」

「師匠…」

「お主は何も悪うはないぞ。どのような事情があるにせよ、まゆみもいい大人なんじゃ。何もかもお主がしょい込む事でもない。それよりも、はるかよ。」

「はい。」

「これからの敵はもっと強くなる。じゃからもっともっと修業に励むのじゃぞ！」

「はいッ。」

「ビッグバンという大爆発の炎。その炎から生まれた力。その力とは熱であり、人間の中にもその熱は流れておる。それがお主の使う内力の秘密じゃ。またの名をメキド。人間の血が赤いのは、まさに儂らを生んだ炎がそんな形態をしているように、その血縁(けつえん)たる人類にも体の中をマグマの如き炎が流れ、力を生み出す基となっておるのじゃ。言い換えれば、儂らは同じ血を受けついでおるのじゃから、原始の炎と呼ばれる存在にまで力を高めるコトができる。この大宇宙を作り出した力の域にまでじゃ。じゃから今の自分に決して満足するでなく、毎日、己を磨くのじゃぞ！」

「はい、師匠！」

「そうだぞ！はるか。もっと頑張らないとイカンぞッ。」

正友がフザけ気味にそう言ってきた。正友なりに重い空気を払拭しようとしたのだが…。

「馬鹿者！お主もじゃ!!」

あべこべに、鮎吉に一喝(いっかつ)されてしまった。

「さて…と情報収集に行ってこようかな…。」

「もうッ。お兄ちゃんが悩んでるのにアンタって人はッ！」

正友のＫＹな発言は、お堅(かた)い鮎吉とはるかのひんしゅくを買った。

「ハハハハ。」

そんなやりとりを見て、秀樹が弱くだが笑ったので、はるか達の口論は止まってしまっていた。

「みんな心配させて悪かったな。正友は俺が暗くなったんで気を利かせてくれたんだ。だから悪く言わないでくれ。」

まゆみに同情的だったはるかだが、秀樹が自分を労(いた)わる正友の気持ちを知り、ゆとりがないのに配慮(はいりょ)したのを見て、鮎吉が言った“大人”としての分別(ふんべつ)とはこういう意味なのだなぁと思った。

まゆみは自分の弱さを克服(こくふく)できずその力を誤った方向に向けてしまった。だが、秀樹はどんなに辛くても仲間を思っていて、そこが決定的に違う。そこが立派だと思っていた。

秀樹は立ち直ったが、交流を兼(か)ねたサッカーの試合は勝敗をつけぬまま散会となった。一時はどうなるかと思われた修羅場(しゅらば)が過ぎ、帰り道ではさっきの惨事(さんじ)を忘れたかのようにみんなが明るくしていたが、その誰もが少なからず動揺を引きずっているのが見て取れた。その中でも秀樹がもっとも心を暗くしているように見えた。が、彼はなんとかして事の経緯(けいい)や真意を探ろうとして寡黙(かもく)に考えていたのであった。

それは…ずっと後で判明するのだが。秀樹とまゆみが別れた理由、そして秘宝を巡る戦い。それらが果たして結びつくのか？まだこの時は誰にも分からないでいたが、その事実が明らかになった時

はるかに壮絶な苦しみが押し寄せる事になるとは、なおさらの事、誰にも全く予想がつこうはずもなかった。

第二集　完

バトルボーラーはるか
第二集　星間戦争
第6章・誤解

http://p.booklog.jp/book/61176

著者：Ψ　(Eternity Flame)英　樹(はなぶさ　いつき)
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/eternal-spirit/profile
ブログ：　http://profile.ameba.jp/jjmmd123/

編集：Ψ　(Eternity Flame)　秋乃空(あきのそら)
ブログ：　http://profile.ameba.jp/battleballer-haruka/

感想はこちらのコメントかブログへ
http://p.booklog.jp/book/61176

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/61176

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ